

2018年度 世界展開力強化事業

中南米との大学間交流プログラム（短期留学）帰国報告書

国際食料情報学部・国際バイオビジネス学科・1年・大西 弘晃

私は、このプログラムの参加に対し大きく3点の学習目標を設定しプログラムに臨んだ。

まず一点目は私が所属する国際バイオビジネス学科は文系よりの学科であり、畑で農作業を自らの手で行うというよりも、生産や流通に関わる経営組織がどのようなものを理解する学科であるが、現地や農場に自らが立ちフィールドワークや自身の経験からバイオビジネスを理解することも必要であると考えたからである。

二点目は、私自身中南米ラテンアメリカの地域へ旅の経験から面白さを感じとても興味があり、日本とは全く異なった国民性や考え方の違い、場のエネルギー、ダイナミズム圧倒され、より彼らについて知りたいと考えており本プログラムの期間でよりメキシコ情勢への理解を深めたいと考えたためである。

三点目は、大学入学後英語はもちろんのこと、現在特に力を入れて勉強しているスペイン語つまりラテン系言語の習得をしたいと考え、将来中南米地域への農業へ貢献したいと考えたためである。以上述べた三点が本プログラムへ参加した目的である。

私は上記三点の目標達成のために現地で行った活動内容の一点目は授業への積極的な参加である。本プログラムの授業は我々のために特別に開講された英語により行われる授業であった。授業内で取り扱われる領域はとても広く、私の所属するビジネス、マーケティングの授業から農業工学に関する授業まであり、今までに考えたことのない未知の領域を知るきっかけになり、自分にとってとても有意義なものになった。特に専攻であるビジネスの授業ではメキシコ国内シェア、国際シェア、さらには国内に抱える貧困問題に関するメキシコ人から見た知見を学習することができた。

さて、次は本プログラムの二大柱であるフィールドワークに関する報告である。フィールドワークを行なった場所は大きく分けて二箇所である。一箇所目はプエブラ州で2日間に渡って行われた。二箇所目は、モレロス州である。

まず一箇所目のプエブラ州へのフィールドトリップに関してはチャピngo大学で教鞭をとっておられる穂積卓雄先生が同行して下さり2日間フィールドワークを通した学習

を行った。具体的には、メキシコの輸出産品1位であるアボカドの栽培現場、様々な種類を栽培するコーヒープランテーション、バナナプランテーション、コーヒー豆加工工場への見学も行った。このフィールドワークを通してとても興味深かったことは、我々消費者として立場で見ると分からない現場で行われている工夫と格闘である。このフィールドワークにおいて一番衝撃を受けたことは農場の様子が今まで日本で見てきたものと大きく異なる点であった。私はメキシコに行く前まで農場の様子とは、日本のように綺麗に整地されているものだと思っていた。しかし現地のバナナ農園を視察するとジャングルの中であり農場内は急な傾斜がある。一番驚いたことはあちらこちらに不要となったバナナの葉を地面に放置されていた点である。説明を聞く前まで自分の中では荒地だと思っていた。しかしながらこれが工夫だったのだ。バナナの葉を放置することによって微生物の働きも借りながら腐敗を進め土壤の栄養にするというものであった。この取り組みは化学肥料に頼ることなく、持続可能な農業が可能ということであり、自然のサイクルから有機物を回収することができる例でとても感心した。我々の国でも有機農業と呼ばれる農業形態は欧州に比べるととても規模は小さいが行われている。しかしながら有機肥料や土壌を自然以外からのプロセスを利用している形態が多いと感じている。メキシコで見たこの仕組みは単純に見えるがとても単純に感じるが最も合理的な考え方であるとわかった。

さらには改善すべき課題と格闘もある。それはコーヒープランテーションに関することだが、まず言えることは日本でも同じ状況だが病害虫への対策である。数カ所のコーヒープランテーションの視察を行ったがほぼ全ての地域においてサビ病の被害が出ていた。これに対し、種苗会社の研究により病気に対策すべく病害虫へ強い品種の研究が行われており植え付けも行われているが、必ずしもその品種が植えられていないという現状もある。これはメキシコにおけるコーヒー豆の取引の携帯によるものであった。メキシコのコーヒープランテーションでは、コーヒーチェリーの皮をむかずに水分が多く含まれた状態で農家から取引されるという。農家にとって、どの品種を植え付けるかという意思決定を大きく左右する要因は、一つの苗木に対していかに多くの実をつけまた、いかに一つの実の重量が大きくなるかという話を聞く。もちろん病害虫へ強い品種の栽培も行われているが、しかしながら苗木からの収量が減ってしまうため多くはない。このことから一つのプランテーションでリスクを抱えながらながら様々な品種を栽培しているという。また、メキシコのコーヒー栽培では様々な苗を植えているため収穫時も品種を分けずに出荷してしまうという。現状の栽培する環境から種別に分けるのは難しいが、他のコーヒー栽培国が行っているように種別に収穫を行えば商品価値も上がるのではないかと考え、メキシコの農業の課題や格闘を理解することができた。

次に述べるのは、日本から20年以上前に渡墨された日本人農大OBの鈴木孝さんの経営するプエブラ州に立地する農場と文化体験フィールドワークである。このフィールドトリップは3日間に渡って行われた。前段落で述べたフィールドトリップとは内容が多少異なり、農場での作業体験の他にメキシコの歴史背景、メキシコがどのような文化的側面背景を持つのかを理解することにとっても役に立つプログラム内容であった。まずは鈴木さんの経営する農場について説明する。

鈴木さんの農場で栽培する作物は典型的なメキシコで栽培される作物とは全く異なり、メキシコ国内ではニッチとも言える中国野菜の栽培や日本野菜の栽培が主であると聞く。ビジネス学科の人間として、メキシコ国内での需要と消費、競合相手に関して尋ねた。まず、需要と消費に関してだが、数十年前はそこまで多くの需要はなく在墨日本人への販売が主だったというのが、近年の中華系韓国系移民の増加によって飲食店のみならず、メキシコ国内での個人消費が増加しているということであった。次に強豪相手に関してだが、メキシコ国内ではこのような作物栽培をする農場はほとんどおらず、独占状態ということであった。理由としては、メキシコ人の食文化とは大きく異なる作物であるとともに、この作物栽培のノウハウや市場がとても限られるということ、また作物によってはメキシコ国内では種子の入手が困難であるという点も大きな要因であると聞いた。さて、農場体験の話へ戻すが我々のグループが経験させていただいた作業は大根の種まきやキュウリの収穫さらにはあまり日本では見られない白菜の根の植え替えの体験も行なった。

3日間で行なったフィールドワークの二点目はメキシコの歴史的施設への見学である。我々は旧スペイン植民地時代に建設されたメキシコを知る上で鍵となる、階段状に白い塗装の家屋広がる神秘的な町タスコ(TAXCO)やモレロス州の州都で古くから行政の中心であったクエルナバカを訪れた。

まずタスコの町だが昨年地震によって途中の道路が土砂崩れで塞がれてしまう事例や一部が損壊するという残念な点もあったがおおよそは以前と変わらない街並みが保存されているという。この街は14世紀から鉱山の町として栄々でもシルバーアクセサリーの販売は町の大きな資源の一つになっているという。さて町の詳細だが17世紀メキシコはスペインの植民地でありこの地も銀の生産地として広く認識されていたためスペイン人の入植が行われた。同時にヨーロッパ文化の流入も起こり町の行政機関や教会の建築様式はバロック建築を用いられている。メキシコ国内でもこの街ほど多くのヨーロッパ式の建造物が残っていることはそう多くないという。1800年代から多く起こった革命や米墨戦争の影響による破壊や近年の凄まじい都市の発展によるものである。我々が日本にいて広く認識するメキシコの歴史や文化背景は南部のメキシコ土着の文化が多いが、ヨーロッパの植民

地支配からみるメキシコの歴史を本プログラムで学習できたことはとても良い経験になった。

さて次はモレロス州都クエルナバカ見学に関して、当初の予定では16世紀に建造された州庁舎前に佇むクエルナバカ大聖堂を訪問予定であったが残念ながら地震の影響により現在も閉鎖されており教会内部の見学は不可能であった。しかし外観は教会の形をとどめており早急な復旧を祈るばかりであるが教会設立目的と歴史は伺うことができた。目的の一つはスペインのキリスト教普及さらには原住民を討伐するための拠点としての機能も教会が果たしていたという。現在でも、メキシコに限った話ではないが教会を中心に町が広がりコミュニティーの中心として教会の存在意義、影響はとても大きいものであると感じた。これらのヨーロッパ植民地時代から残る施設見学は、我々がネット上で見聞きする情報とは違った視点からメキシコの歴史文化や情勢を理解する上でとても役に立った。

最後に本プログラムの自己評価と将来の目標に関して述べ、本レポートのまとめとする。本プログラムへの当初の参加目標であったメキシコにおけるバイオビジネスへの理解、国内情勢への理解、スペイン語習得の三点だが概ね達成することはできたように感じる。またこのプログラムへの参加によって、自分自身の弱みや強み、メキシコにおけるバイオビジネス、社会背景の問題も同時に発見することができた。自分の弱みに関して特に痛感したことは西語によるコミュニケーションの難しさである。残りの4年間をかけて自分自身の弱みを授業や外国人留学生とのコミュニケーションで磨き上げ強固なものにすることが自身の課題と直近のゴールであることの認識ができた。また、メキシコの大きな社会問題の一つである絶対貧困、麻薬組織（カルテル）の割合を減らし社会の治安と平和を構築する策の提案を考えることが今後4年間の目標であり、その後理論のみならず実行しメキシコへバイオビジネスのプロフェッショナルとして社会貢献することが自身の将来の大きな目標である。

本プログラム参加をサポートしてくださった国際協力センター、チャピング自治大学、日墨教会の皆様へ感謝の意を表します。プログラムから発見した、ものは生涯の財産でありかけがいのない経験ですご支援くださった皆様ありがとうございました。